

〈はじめに〉

小学校高学年の頃、つるかめ算や植木算が、どうしてもわからずに、泣きながら勉強させられた記憶があります。その頃から、算数の文章題は難しい、という気持ちが強くなり始め、中学以降の数学に対する苦手意識につながっていったように思います。しかし小学校低学年の頃は、算数は得意で好きな科目でした。きっと、その中で出題されていたであろう文章題にも、気後れなく取り組み、解答できていたのだと思います。ただ、どのように解いていたか、という記憶はなく、それが残念なところです。なぜなら、今回のテーマとして取り上げる算数文章題は、ちょうどその頃の、小学校算数のごく初期に学習する問題を対象としているからです。たとえば、「りんごが3こ、ありました。1こ、たべました。りんごは、いくつになったでしょう？」というような問題を、自分は、いったいつから、どのような能力を背景として、解けるようになったのか…◆算数文章題について考えることは難しい。そして、その難しさを表現することも難しい、と感じています。その原因は、「解くこと」というプロセスの中に、さまざまな能力が絡み合っている、という点が、まずひとつ。それから、算数学習のために人工的に生み出された文章題という形式が、人間の発達との関連のなかで、これまであまり分析されたことがなく、きわめて実用的に、また、ごく自然に、用いられてきた、という点にあるような気がしています。◆6～7才という年齢から、算数文章題が開始されるという事実は、学校教育自体が、古くから、その年齢を開始適齢とするのと同様に、高い合理性を持っているように思われます。自分と他者の心理洞察の高まり、物の具体的操作から抽象操作への移行、推移や変化を表す多彩な語彙・文法の習得…これらの事柄が6才という年齢に一気に高まって寄り合い、その上に、算数文章題という学習形式が開花している、そんなイメージを持っています。◆算数文章題を考えることは難しい、と書きましたが、文章題を苦手とする、というよりもまだそのスタートラインにも立てていない子どもたちにとっては、文章題に取り組むそのことが、難題です。そうして、その難しさも一様ではなく、ひとりひとりが、少しずつ異なる問題に突き当たっているように感じられます。それらの問題に光りを当てて、その形を浮かび上がらせることが、学習の糸口につながって行くものと考えています。